

「子どもをまん中にS Tと親が3人4脚で進もう！」

ことばの教室の保護者の団体「NPO 法人全国ことばを育む会」の標語「子どもをまん中に先生と親が3人4脚で進もう！」を私は大好きなので、「先生」を「S T」に言い換えてみました。

子どもに関わる言語聴覚士（以下S T）は、子どもに働きかけ、子どもの能力を伸ばす専門職だと期待をかけられます。確かにそのとおりです。が、S Tは子どもにも働きかけるけれど、同時に保護者の助けにもなるようにふるまう必要があると私は思っています。

S Tの関与によって子どもがコミュニケーションじょうずになりことばが伸び、働きかけに応じてくれるようになると保護者はうれしくなり、子どもに今までよりも熱心に望ましいかかわりを行うようになります。一方、子どものことばが遅いのが心配で無理に言わせようとしたり、イライラ叱ってばかりの保護者に、子どもの状態を説明し、今、何をどんなふうにしていったらいいのかを説明し、「一緒にやってみましょうね」とS Tが寄り添うことで、保護者が落ち着き、望ましいかかわりがじょうずになってくると、子どものことばやコミュニケーションも大きく変化します。

S Tが誰を中心に関与するにせよ、結果的に親子がハッピーになれるならなんでもOKです。「親と子は合わせ鏡」であり、両者の相互作用の中で、親子は一緒に成長するからです。成長の可能性をもっている親子の関係に3人目として加わるのがS Tです。子どもだけ、親だけ、S Tだけががんばったり、がんばらせたりするものではありません。

親子の歯車がかみ合い始めると、どんだんいい方向に進んで行く。これは私にとって当たり前すぎる光景で、保護者や家族を支援しよう！と特に意識したことはありません。でも、最近保護者との接し方の悩みを相談されることもふえているので、私が「当たり前」と思っていたことを言語化し、皆さんと共有できればと思います。

障害のあるお子さんの来所・来院時にはたいていお母さんが横にいます。でも、その母子の後ろには必ず家族がいます。仕事でなかなか来られないかもしれないけれどお父さん。通所に同伴できずに保育所や祖父母にあずけられているきょうだい。この子の将来はどうなるかと心配し、成長が見えるとわがことのように喜んでくれる祖父母や親戚も。

子どもは、誕生当初、ケアしてくれる人がいなければ生きられない状態で生まれます。成長につれて、徐々に自立の度合いが大きくなり、手のかかり方が減りますが、障害があったり発達特性が強かったりすると、応援の手の必要な時期が長く続きます。限られた場面で子どもとお母さんにしか会えない子どもS Tであっても、その子の周りの家族全体を視野に入れた応援として、どんなことができるのでしょうか。地域活動を通して私が考えて来たこと、やってきたこととお話ししたいと思っています。